

初対面時の会話終結部にある日本語交感発話の特徴に関する考察

しょう けつ
肖 潔（北海道大学大学院生）

1 はじめに

交感発話は、文化人類学者のマリノフスキーが提示した‘phatic communion’（交感機能）という用語から来ている。「交感機能は、情報内容の伝達よりも、安定的にやりとりできる状況を作ったり保持したりすることに重点のある言語行動が持っている作用を指す。交感機能が強い典型的な例は挨拶である」（加藤 2004:112）。これまで、交感発話といえば、会話の場を和らげる機能を持ち、主に会話の本題に入る前（会話の開始部）に存在するものという認識であった。しかし、実際は会話の開始部だけではなく、会話の中心部や終結部にもさまざまな形で存在している。本発表は、初対面時の会話の終結部にある交感発話の特徴を明らかにすることを目的とする。

2 先行研究

2.1 交感発話の特徴

交感発話の特徴について、肖（2019:243）では、次のように「狭義的な交感発話」と「広義的な交感発話」という二種類があると述べている。

- (1) I 社交性がある・情報性が低い・目的性が弱い表現（狭義的な交感発話）
- II 社交性がある・情報性が低い・目的性が強い表現（広義的な交感発話）

肖（2019:237-243）は、この三つの特徴を次のように説明している。「社交性がある」とは、安定的な人間関係の形成や維持に貢献することである。「情報性が低い」とは、情報内容の伝達に重点を置かないことである。これは、グライスが提唱した会話の効率性とは異なり、配慮表現の特徴として扱う。そして、「目的性が弱い」とは、ゴシップのように、「自由」(free)で「目的なし」(aimless)に些末な話をするすることである(Malinowski,1923:149)。「目的性」は、J.R.サールの「言語行為論」における「発話内の目標（発話内目的）」(illocutionary point)とも関連付けられる。交感発話は、当たり障りのない話を意図なしにすることによって対人距離を縮めるため、伝達行為につながる発話目的が弱いと見なす。

3 日本語の交感発話について

3.1 交感発話の典型的特徴とその分類

発表者は、肖（2019:243）の考察を踏まえた上で、さらに「共感性」という要素を考慮に入れ、「双方向的」「疑似双方向的」と「一方向的」の特徴から交感発話の分類をさらに検討する。紙幅の制約上、分析例を取り上げた上で、分類案を表1のようにまとめた。

- (1) —おはようございます。
- おはよう（ございます）。 「双方向的」

(2) A：今日は雨が降るだろう。

B：ほんと、雨が降るらしいね。 「双方向的」

(3) A：今日のメイクはお似合いですね。

B：(笑) 本当?! ありがとうございます。 「疑似双方向的」

(4) ありがとうございます。[感謝]

ごめんなさい。[謝罪] 「一方向的」

表 1 交感発話の枠組み

特徴 種類	社交性	情報性	目的性	共感性	性質	例示
典型的交感発話	有	低	弱	強	双方向的	慣習的なあいさつ言葉
疑似交感発話 (タイプ A)	有	低～高	弱～強	強	双方向的	雑談(A は命題内容上共通性があるものの、B は共通性がないが、共感性があるもの)
疑似交感発話 (タイプ B)					疑似双方向的	
準交感発話	有	低	強	× (*)	一方向的	感謝・謝罪・祝福など発話内の目的を持つような表現

(*)：人間関係に貢献するが、命題内容上の共通性があるかつ双方向的に共鳴を引き起こすような共感性には当てはまらない。

表 1 で示しているとおり、典型的交感発話は、社交の場に用いられる決まり文句で、発話の情報内容が少なく、発話の行為目的が弱く、強い共感性が表明される表現である。疑似交感発話は二種類のタイプがあり、典型的交感発話のように定型性の高い表現は用いられないが、話者と聴者がともに深刻な話題を避け、ポジティブ・ポライトネス (B&L,1987) の共感的機能を持つ表現である。タイプ A は命題内容上共通性のある言葉で交わされるが、タイプ B は直接的表現や近接化的表現を用いて共感を形成するものである。最後に、準交感発話は、典型的交感発話と疑似交感発話のように、強い交感機能は持たないが、人間関係の構築と維持にも貢献している表現である。

3.2 初対面における会話終結部の交感発話

本節では、先行研究の記述を踏まえ、社会語用論的視点、関係論的ポライトネスの観点、言語のメタレベルでの分析を加えて、会話の終結部に現れる交感発話はどのような表現が用いられ、どのような特徴を持つのかということを考察する。そして、その性質、位相、動機づけを明らかにする。

3.2.1 会話の構造

会話は①「出会い」、②「話を開始する」、③「用件」、④「話を終了する」、⑤「別れる」という五つの部分に分けられると考え、終結部を④「話を終了する」、⑤「別れる」の二つの部分に当てはめて分析する。

3.2.2 各場面における交感発話

三牧 (2013:4-5) を参照した上で、本発表で論じる初対面時の会話場面を主に下記の三つに分類した。

- A. 直接会話するのは初めてでもその会話の相手に関する情報を既に有している場合
- B. 制度的な枠内における会話参加者の役割関係が明確な場合（例えば医者と患者、店員と顧客など）
- C. 社交的な場面で純粋に個人対個人として未知の相手と一定時間において自由に会話をする場合

3.2.2.1 場面タイプ A における交感発話

まずは、A の場合の例を見る。下記、(5) の例があげられる。

(5) J が人事スタッフ、B が営業部部長、A が新入社員である。

J: (B に対して) 部長、今年度の入社試験で合格した A さんです。(それから、A に対して) こちらは営業部の B 部長です。

A: はじめまして、新人の A です。どうぞ、よろしくお願いします。

S: あ、よろしく。先日、A さんの話を聞きました。頑張ってください。

A: はい、頑張ります。

(5) では、営業部部長 B と新入社員 A が初めて顔を合わせるのであるが、A が実際に入社する前に、営業部部長 B がすでに A の噂話を聞いていた。そして、「—どうぞ、よろしくお願いします。—よろしく」のように、社会地位が異なることによって、話者と聴者の会話スタイルが丁寧体と普通体のように不揃いになるが、「よろしく」を双方向的に用いている。この場面において、二人とも初対面であり、相手に実際の要件で頼むことはない。会話参加者が「今後いろいろとお世話になるところがあると思いますが、よろしくお願いします」という意味合いを含めて発話していると考えられる。「社交性」「情報性」「目的性」「共感性」という四つの側面から分析すると典型的交感発話の特徴を持っていることが分かる。

また、社会語用論（滝浦 2016:81、以下同様）という視角から見ると、(5) は、会話参加者にとって標準ないし規範の場面である。交感機能に関していえば、いわば“無標”の交感機能の表現であると言える。これは、場面や人間関係から予期される、“デフォルト（初期値）”としての期待の水準である（滝浦 2016:81）。そのため、交感発話も特に意図がなく典型的な表現を表出している。そして、動機付けにおいては受動的となる。

さらに、ワッツによると、このような言語的ふるまいは「ポリティックなふるまい」で

あり、すなわち「社会的制約にとって適切だ、目立たないもの」として認識される (Watts,2003:19、以下同様)。

引き続き、(5)における「頑張ってください」を見てみよう。これは、会話を終了するにあたり、営業部長 B が新入社員 A に対して発した励ましの言葉である。発話内力を持っており、目的性が強いほうであるととらえる。しかし、人間関係の構築にも貢献しているため、社交性があるととらえ、準交感発話として扱う。

また、話し手 B にとって、新人 A とは初対面であるが、A が実際に入社する前に（試験や面接の段階で）既に A に関する話を聞いたことがあり、A に対しての印象がある。したがって、新人に期待しているという意味を込めて、「頑張ってください」という発話行為をしたと考えられる。これは、何らかのハプニング（出来事）があった上での意図的な言語使用の結果である。社会語用論という視角から見る位相について、交感機能的には、有標の交感機能が表現・伝達される水準ということになる。標準や規範から見れば、そこからの動機づけられた偏移ないしずれと言うことができよう。よって、動機付けにおいては能動的となる。

さらに、ワッツの関係論的アプローチからいうと、これは「期待できるレベルを超越している」言語的ふるまいであるため、「ポライトネスのポジティブ側」に向かって、ポライトと呼ぶべきである (Watts,2003:19、以下同様)。

3.2.2.2 場面タイプ B における交感発話

次は、場面タイプ B の会話参加者の役割関係が明確な場合の会話例を考察する。

(6) (販売店で) K が顧客、H が販売員である。

K：アリペイをお願いします。

H：はい。(スキャン作業) (レシートを渡しながら) レシートです。

K：ありがとうございます。

H：ありがとうございました。

(6) は、お店でお買い物をするときによくあるシーンである。買い物が終わって、顧客 K も販売員 H もお互いに感謝をしてから会話を終了する。これは、発話内行為の目的を持ったため、準交感発話として扱うことができる。しかしながら、この会話場面は販売行為を終了しようとする場面で、顧客と店員の相互の感謝は謝意を表す目的を持つというより、会話を終了するメッセージ性がより顕著である。よって、これは準交感発話が転用された終結のメッセージ性を示す言語的ふるまいという解釈を加えたい。

また、ここでは、H は最後にタ形を用いている。お買い物をするという出来事が終了したため、「ありがとうございます」のではなく、「ありがとうございました」を用いて会話を終了することがみられる。逆に、タ形を用いないと、会話はまだ継続できるととらえられるのである。よって、タ形はある意味で、終結性を持っていることが分かる。引き続き、下記 (7) の例があげられる。

(7) (医療機関で) K が患者、G が看護師である。

G：(患者の薬を用意し、薬の用法を説明する)。

K：はい。(お会計を終わってから) ありがとうございました。

G：お大事にしてください。

(7) は、医療機関で受診をした後に、よくみられる会話場面である。医療機関で受診をしたあと、看護師や先生がよく患者に対して「お大事に」「お大事にどうぞ」「お大事にしてください」という言語使用を選択する。これは本来「ご体調が早く回復できるように、よく休んでください」「大切に扱ってください」という願望表明の準交感発話であったが、現在は医療現場における医者と患者の慣習的な用語になったとみられる。

これまでの分析でみたように、「ありがとうございます」「お大事にしてください」の二つの会話場合は、準交感発話が転用されて会話の終結を示している。これは標準ないし規範に対する意識の変化が関係しており、受動的～能動的の中間にある変化の位相だととらえられる。また、これは役割関係が明確した場面において慣習化した言葉であるため、ワッツの目立たない、ポリティックな言語的ふるまいとして扱うことができる。

3.2.2.3 場面タイプ C における交感発話

最後に、場面タイプ C の社交的な場面で未知の相手と一定時間、自由に会話をする場合の会話断片を考察してみる。次の (8) の例があげられる。

(8) 一日の学会が終了し、夜の懇親会で学生 A と学生 B が話をして会話を終了しようとする時点である。

A：私も本日京都大学の先輩が発表している内容に興味を持っています。

B：ええ。そうですね。分析も深いし、結論もおもしろいです。

……あ、すみません、ちょっと帰りの時間になりまして、そろそろ…

A：はいはい。

B：また SNS で連絡をするように。

A：分かりました。北海道に来たらぜひ連絡をしてください。案内をしますよ (笑)。

B：あーはい (笑)、どうも。それでは、また。

A：またね。気を付けてください。

(8) は、同じ年の二人が学会の懇親会で雑談をして、会話を終了する際の交感発話の使用例である。「—それでは、また。—またね」は形式化した別れるときのあいさつ言葉であるため、典型的交感発話として扱うことができる。

そして、「北海道に来たらぜひ連絡をしてください。案内をします」という発話は、相手に積極的に好意を示し、今後の友好関係を構築する意欲がみられる言語的ふるまいである。言語形式上は定型性がないが、ポジティブ・ポライトネス (B&L, 1987) の共感性がみられる。よって、疑似交感発話として扱うことができる。これは、標準ないし規範の場面からはずれた偏移ないしずれの位相であり、能動的な動機づけととらえられる。また、ワッツのポライトな言語的ふるまいに当てはまる。

4 まとめと今後の課題

初対面の会話終結部の会話例の分析によって、下記のことが明らかになった。会話の終結部には、「それでは、また」「よろしくお願いします」という典型的交感発話があるほかに、「頑張ってください」のような激励を表す準交感発話もあれば、「ありがとうございます」「お大事に」とのような準交感発話が転用され、会話を終結するメッセージに用いるものもある。また、相手に対して積極的に好意を表すような疑似交感発話もみられる。かくして、終結部の交感発話は、仲良く会話を終了し、今後の友好関係、再会する時の会話も順調に行われるために土台を作るというメタレベルの機能を持つものが明らかになった。よって、次の表2にまとめることができる。

表2 初対面時の会話終結部の交感発話の特徴

交感発話	性質	位相	動機づけ	ポライトネス
典型的交感発話	双方向性	標準ないし規範	受動的	ポリテック
準交感発話	一方向性	偏移ないしずれ	能動的	ポライト
	転用	変化	中間的	ポリテック
疑似交感発話	疑似双方向性	偏移ないしずれ	能動的	ポライト

本発表では、初対面時の会話終結部における交感発話を分析するにあたり、ごく一部の現象を扱ったに過ぎない。今後の研究の方針として、会話の構造と場面をさらに綿密に考察し、部分終了の話題も加えて分析を深めたいと考えている。

謝 辞

本研究は北海道大学大学院文学院「共生の人文学」プロジェクトの助成を受けたものです。

参考文献

- Brown, P.& Levinson, S (1987[1978]) *Politeness : Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.(邦訳：田中典子監訳、斎藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳 (2011)『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』研究社)
- 加藤重広 (2004)『日本語語用論のしくみ』研究社。
- Malinowski. B (1923) *Phatic Communion, Communication in Face to Face Interaction, Selected Readings*. Edited by John Laver and Sandy Hutcheson, 1972, 146-152, Great Britain : Penguin Books.
- 三牧陽子 (2013)『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』くろしお出版。
- 肖 潔 (2019)「あいさつとあいさつ表現の判断基準及び分類に関する考察—日本語の視点をもとに—」、『研究論集』19、233-243、北海道大学大学院文学院。
- 滝浦真人 (2016)「社会語用論」、加藤重広・滝浦真人 (編)『語用論研究法ガイドブック』、ひつじ書房。
- Watts, Richard J (2003) *Politeness*, Cambridge : Cambridge University Press.